阿部知二全集

第8巻

阿部知二全集

第8巻

河出書房新社

阿部知二全集　第8巻

一九七五年六月十日　初版印刷
一九七五年六月十五日　初版発行

著　者　阿部知二
装　画　平塚運一

発行者　中島隆之
発行所　株式会社河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三ノ六
電話(〇三)二九二一三七一一
振替東京一〇八〇二

印刷　暁印刷株式会社
製本　中西製本印刷株式会社
定価は函・帯に表示してあります

目次

人工庭園 5
白い塔 55
燔祭 222
いたちの国 237
高慢と偏見 265
螺旋 276
影と一撃 294
解題 福田久賀男 315
解説 黒井千次 321

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

阿部知二全集　第8巻

人工庭園

山径を、一人の若い男と二人の若い女とが登っていた。三人とも学生風で、言い合わせたように黒い外套をきていた。そのあたりはゆるやかに傾斜した裸山で、それをいちめんに蔽った枯笹が、澄んだ秋の日に白く光り、やや強い風が吹いてくるたびに、干からびた音をたてて鳴りぞめいていた。笹原の向うには黒ずんだ杉の林があり、その間にまだ真紅や黄の葉をつけた木々も見えていた。

彼等は、この山を越えたところにある小さな湖水のふちまでゆくところだった。すこし以前にそこで自殺した女があった。それは、ここからさほど遠くないM市の女子大学の学生だった。この若い男、下田参吉は、その愛人で、M市からは遠い都会の大学の法科生だった。若い女のうちの林野明子は、自殺者出石芳江の上級生だった。もう一人の滝岡富子はその同級生だったが、最近に学校をやめていた。下田の四角な顔と林野の細い顔とは日の光のなかで蒼ざめてみえたが、滝岡の円い顔は、その反対に赤く燃えて汗ばんでいた。

なかば笹に蔽われた細い径だったので、下田、林野、滝岡の順で一列になっていたが、何となく、まったくばらばらに歩いているという感じだった。もう長いあいだ黙り合っていたのであり、別々のことを彼等が考えながら歩いているということは、たしかだった。たがいに、幾分憎み合い、またはさげすみ合っていたかも知れない。しかしそれでも、みなが死んだ出石芳江のことを考え、そのかぎりでは彼等は結ばれているといわなければならなかったろう。

しばらくして杉の森の中に入りかけたころに、重くるしい沈黙に倦きたというように、年少の滝岡富子が、口をひらいた。

「遺書があったんだってね。そして、それをやつ等が隠すか焼くかしたらしい」

「それは、警察がやったことですか。それとも学校が……」と、下田参吉は後を振り向きながらたずねた。

「さあ、それは知らないんだけど」

すると林野明子が、前を見たまま歩きながら、いった。

「富子さんは、どうしてそんなこと知ってるの」

「うちの店にきた新聞記者が、そういってたけど」

それでまた話が切れて、彼等は仄暗い林の中に入った。それから林を抜け、小さな峠にさしかかったが、その頃には、いままで晴れ渡っていた空に、暗灰色の雲がしきりに流れはじめ、風はいっそう冷たくなった。林野明子は何度か咳をした。ようやく峠までくると、前の裸山のかげに、

灰青色の湖面の一片がにぶく光っているのが見えた。三人は、しばらく立ちどまってそれを眺め、それから降りの径を歩きはじめた。しかし、少しゆくと、また立ちどまって、眼の前のかなり向うの深い谷の方を見つめた。そこの、枯れた疎林のなかに、黒い外套をきた男の影が見えたからである。明かにそれは出石芳江が自殺した地点と麓の村の人が教えてくれたところの方から、出てきたものだった。その男は、この三人には気づかないで、こちらに横を向けて歩いていたが、まもなく岩鼻のかげに、その小さく見える影をかくした。

三人は、一瞬顔を向け合ったが、結局何もいわず、首をかしげながら、暗い眼の色を見合せたばかりだった。それからまた、せかせかと、風に鳴る枯笹原の中をおりはじめた。雲の影はひろがり、また厚くなって、日がかげってしまった。

……滝岡富子は、今しがた谷間にちらついたものが、誰だったかを知った、と思った。それは、おそらく間違いのないところ学校の補導監という役名を持つ平戸喜平教授であったろう。しかし彼女は、下田と林野とが、それとみとめたかどうかは知らない。多分、気づかなかったのだろう、ということは、さっきの顔つきからも察しられる。しかし、いずれみち、その平戸らしいものとは、ここを降りて行ったあたりで出合うことになるだろう。そこで二人はどうするだろうか。林野明子は、憎みさげすんで平戸を責め立てるか。下田参吉は……はげしく怒り狂って、相手につかみかかって、咽喉首を締めようとでもするか。それは空想してみるだけでも物すごいことだが、それでいてなかなかの見ものだ、とそれを見たいような気もする。

いったい滝岡富子は、どういうつもりで、二人と一緒に汽車に乗りこんで、この山にきたか。それが自分では、何の深い意味もなく、ただちょっとした気紛れだったとしか思われない。というのは、彼女と出石芳江とは、同級生で、寮でも同室だったことがあったとはいっても、それはほんの数カ月の間のことであり、性質も趣味もまったくちがい、その上相手は自分よりも三つも年上で、たがいに親友だったなどとは、決していえなかったのだ。この山を訪れてきたことは、たしかに奇妙なことだ、と我ながら思う。

……その女子大学は、M市のうしろの丘の中腹にあった。M市は、かなり広い豊かな平原の、やや海から離れたところの山手にある都会である。海に近い方には重工業の工場がいくつかあり、すこし遠くには米軍の飛行場もある。しかしM市自体は古くからの城下街で、大きくはあるが静かだといっていい。織物や陶器で名高く、街も、一部分は焼

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

けたとはいえ美しい方である。昔から仏教が栄えたところで、街の北の山手の方には、大きな伽藍や塔が立ちならんでおり、その一郭にM女子大学が、静かな林につつまれて立っている。学校の裏の丘にのぼると、海もかすかに見えて、いい景色である。

その女子大学は、近県によく名を知られている。富子のように縁も薄かったものは、詳しいことは知らないが、何でも旧藩侯の老夫人が、仏道と教育とに熱心で、何十年も前に創立したものだそうだ。それが発展して、この地方ではもっとも信用のある学校になり、戦後は大学に昇格したのである。老夫人は、いまは校母というような名で、ほとんど引退していて、たまさかの式の折などに顔を見せるばかりだが、それでも、隠然と畏怖の的になっており、その精神は、いまも学校の指導の根本信念というものになっている。また老夫人は、遠く皇族にもつながるということだから、学校内ばかりではなく、M市内外の一般の人々にまで、うやまわれているといわれる。そして、その老夫人の力によってであったか顧問とか評議員とかいうような形で、この地方出身の大臣や議員や僧正や大実業家や博士が名をつらねているばかりでなく、時々はここにきて訓話をしたりする。

だから、富子のような隣県のものばかりでなく、もっと遠く離れた土地からも、はるばるこの学校にくるものが多く、そして寮に入れられる。大抵は——富子のような貧しい田舎教師の娘などではなく、裕福な家の子で、その父兄が、ここの伝統の良妻賢母に娘を仕立ててもらおうと思って送りこんでくるのである。富子には、はじめから性質に合わなかったのも当然のことだった。

まったく、入ってみて驚いてしまった。入学式には、一同がひれ伏している前に、老侯夫人が姿をあらわした。もう七十にもなっているのだろうか、白髪で、蠟のような白い顔で、小肥りの体を紋服でつつんでいる形は、古い古い人形のような妖気を含んでいた。それが、すこし慄える低い声で、——しかし何となく鈴でも鳴らすというような美しい響もこもる声で、富子にはほとんど分らぬ古い言葉の式辞をのべ、何やらの皇太后の御歌を読んできかせた。講堂はその間じゅう、しいんと静まり返っていて、空気もそのまま氷結しそうな感じだった。それから、仏教の方の博士という中老の校長が、これも富子には分らぬ漢語を引いたり、ソクラテスや孔子の名を出したりして訓辞をのべたが、とにかくそれは、「親御様からあずかった大切なみなさんを、精神の薫り高い人格主義の道にみちびこうというのであります」というようなことであった。それから、赤ら顔の巨きな体の前大臣が祝辞をのべたが、それは、日本の国

は一度敗れたとはいえども、今やアメリカと手をくんで、着々と世界の一等の国になる道を歩んでいるのであり、さて、歴史によって古来のこの国の発展のあとを探求してみると、そこには日本婦人が貞淑であったということが絶大な力となっていた、ということが実証されるのであります、と強い響の声でいった。それゆえに、みなさんは絶対に戦後の浮薄な気風に染まってはなりません、ともいい、特に、かりそめにも思想問題にかぶれたりしてはいけないのであって、先にいった日本婦人の美徳とは、申すまでもなく聖天子を崇める心にその根をもつのであります、ともいった。

それでも富子は、桜の花の咲きみだれた中に立つ幾棟かの赤屋根白壁の寮の一つに入る時には、ここにだけは美しい楽しい夢も幾分かはありそうだ、と心をはずませた。

しかし、それどころではなかった。その桜の花のかげに、美しい花壇をめぐらせて、五六十人ほどを入れる寮が並んでいて、彼女はその一つに入ることになったのだが、六人を詰めこむ十畳ほどの室は、掃除はさすがに行きとどいてはいるものの、決して温かな豊かな感じのするところではなかった。彼女の室は二階の隅にあったが、窓にはどういうわけか格子がはまっており、ちょうどその窓のところにひらめく桜の花が、囚人めく彼女たちをあわれむように覗きこんでいる、という感じだった。

各室には上級生の室長があり、各寮棟には寮長があった。室長はTといって、どこかのお寺の娘さんで、平凡な人で、恐わがる必要もないようだった。しかし寮長の方は、最初にみなを集めて話をした時に、ちらとその視線を受けただけで、突き刺されるような気がした。五条真弓という国文の先生で、歌人ということだった。独身の人で、もう四十にもなっているようだった。そのみがき立てたような白い顔は、冷たさそのもの、と見えたが、それはそれで、異様な美しさを持っていた。どこかさっきの藩侯老夫人に似ていると思ったが、後できくと、そのお気に入りという話だった。切れの長い黒い眼が、とくにきれいだったが、そのきれいさが、ますますその人を冷い氷のように感じさせることになっているようであった。

この五条寮長は、富子たちの寮棟ばかりでなく、六つの寮のすべての指導をも兼ねているということだったから、さすがに注意を与える態度にも、強い権威があった。声も、何とはなしに老侯夫人に似ているようだった。話の後先に、ちらと品のいい微笑を見せたりするが、それは妖しく人を惹き入れるようなところもあり、寮生の中に彼女に、憧れているものもあるということも、無理もないとすら思われた。

注意の内容はきびしいものだった。――朝七時に起床、

朝は精神講話が必ずある。外出は午後六時まで。もちろん、行先と用件とを申しのべて許可を得なければならない。入浴は定められた時でなければならない。十時就寝で、その時には灯は消えることになっている。その後まで起きて灯をつけることなどは許されない。朝と夜とには寮長の巡視がある。「お早ようございます」「おやすみなさいませ」と、心に一日の始めと終りとの感謝をこめていうのである。それから、寮生の生活と勉学とのすべての状況は、密接に父兄と連絡を取ってみちびく。というように、こまごまとした注意がつづき、それから服装のことになった。

「清らかな、気品と威厳との匂う服装、というのが私たちの誇りです。制服のことは掲示にある通りですが、それはただ形だけのものであっては困りますよ。着付にも、寸分の隙もないように、端正に、と気をつけていただきます。それから、いつもよくお洗濯して、清潔を保たれますように、ということは、もういうまでもありませんね。服装の汚れは心の汚れなのですから。——それから、これから次第にお暖かになりますけれども、寮に帰っての服装は自由ということになっていますけれども、そこにも本校生の気品は必要でございます。まさか、——何といいますか、腕を丸出しにした何とやらスリーヴなどを着たりしようなどとはどなたもなさらないでしょうね。また、けばけばしい色のリボンで髪を結んでみたり……」

端正に渋い和服を着つけていた五条先生は、そういいながら、嫌悪の情に耐えないというように、その美しい眉をひそめてみせた。

二三日した朝、校長が新入生全部を集めて、精神講話をしたが、その中でとくに力をこめていったことがあった。

「……本校の学生諸君は、とくに本校の教育の核心というところを、胸に刻みこんでおいていただきたいのであります。それは男女の道徳を正しくせよ、ということです。この戦後の腐敗堕落の時代では、いよいよこれを強調しなければ、国民の義務と教育の任務とはいずこにあるか、ということになりましょう。みなさんは、たとえば男と女とが二人切りになったとしたら、これはどういうことになるか、もう十分に分っておられるはずです。かりそめにも、男に指一本触れられたとしたならば、もう堕落の坂を奈落まで転げ落ちてゆくことになるのです。

……小さなことのようですが、いまみなさんをこの壇上から見ておりますと、ずい分とこってりと口紅を塗っている人もあるようです。いったい、私などの若かった頃には、躾ある女性は、ほんの唇の真中のところに、ちょっぴりとつけたものでした。そこに清らかな美があったのです。今頃のは、まったく醜悪です……」

この講話については、富子は、「わたし、この学校に入ってはじめて、性教育を受けちゃったわ」と誰かがいうのを、後で耳にしたことがあり、まさか誰も本気でなど聴いたのではない、とは分った。——しかし、それは後のことで、その朝の校長の話につづいては、補導監の平戸喜平教授が立って、注意を補足した。平戸は、四十を越えたばかりという年輩だったろうか、やや猫背の長身で、知識人(インテリ)というような顔つきをしていた。歴史の先生だそうである。彼は、外出について注意し、たとえば、映画は禁じてはいないが、高級な思想のある芸術の香高いものを見るように、そしてもちろん許可を得ることが望ましく、単独、または男性の友と見ることなどは、今の校長のお話から見ても、論外としなければならぬだろう、といった。ダンスについては、強いて禁止する方針ではなく、自主的な判断に任せるわけではあるが、しかし、あれは正しい娯楽だとは思われない。もし、どうしても行きたいのであったならば、父兄または保証人の証明書と、日時、場所、目的、パートナーとの関係、などを申告したものとを、補導監に提出して許可を仰ぐことをしなければならない。

「……あなた方の、人生のパートナーは、ダンス・ホールなどにはいないのだ、ということを考えて下さい。それはどこに見出すことができるか。いってみれば、科学研究所の中に、あるいは図書館の書庫に、なのです。……常に校長がいわれる人格主義というものは、いうまでもなく共産主義を徹底的に否認排除しますが、それと同時に自由主義をも強く批判するものなのです」

外地から引揚げてきたというこの平戸は、彼一人で学生に対している時などには、何か自由人らしいことをいったりするのだそうだが、こういう場所では、しかめ面のようなものをちょっと作りながら、ことさら頑迷なことをいう。わが身と地位とが可愛いからなのだろう。

こういう風にして、富子の「大学生活」がはじまった。おそろしいところに来たものだと悔み、これでは耐え切れまいと思ったが、それは彼女だけの気持ではなかったようだ。教室でも校庭でも寮でも、多くのものが不平をもらし、それぞれに小さなはかない反抗はしようとしているらしかった。

寮の室でも、息苦しいことではあったが、富子は、いつの間にか、ずるずるにその生活に慣れて行ったようだった。室長のTは、ただ学校のいうことを無条件に信じ従っているだけだった。しかし、いいところは、それを他のものに押しつけたりしようという勇気などはないらしく、富子たちのことについては、まったく無関心で冷淡で、居るか居ないか分らないような人だった。卒業すれば、どこかの坊

さんのところに嫁ぐことになっているそうだ。二年のSは、近県の官吏の娘だったが、いわば皇太子狂で、明けても暮れても、新聞や婦人雑誌で見たその記事や写真のことを口にしていた。昨年この街に皇太子がきて以来のことだそうだ。それも、牢獄のような生活の中での、情熱のはけ口の一種なのかも知れなかった。もう一人の二年のKは、映画と歌謡曲の雑誌の愛読者で、俳優や歌手の噂話ばかりしていたが、これもまた反抗だったのだろう。教室にみなが出た留守など、寮長や補導課のものが室に入ってきて本や持物を調べることがあったから、Kはそういう雑誌などを、戸棚の私物包の中に隠しておかなければならなかった。しかし、その戸棚の私物までも引っかきまわされることもあったから、それで安全というわけではなかった。一年は富子を入れて三人だった。Iという商家の娘は、まだ子供のようなもので、学校のことにも不平もないらしく、ただ少女歌劇を見たがったり、甘い菓子を欲しがったりしているだけだった。——どの室もどの室も、——中には文学少女とか、「赤い」人とかがいる室もあるそうだが、大部分はこうした連中だった。そして、学校の禁圧への反動だったにちがいないが、みなは何かというと、恋の話をしたがった。多くは空想で、夢のようなものだったが、それでもその底には、こう圧しつぶされてはもう我慢し切れないというように欲情が燃えている場合もあったのだろう。

富子は、はけ口をスポーツに——自分の好きなテニスに見つけようとしたが、それはいいことのようだった。あまり上手なものはいなかったから、すぐにも選手になれよう、といわれた。それはどちらでもいいこととして、窮屈な檻に入れられた肉体を、そうして動かしていると、汗とともに鬱さが発散してしまって、明るくいきいきした気分になれることもあった。それだけで満足し切ったというわけではなかったが、ほかのものの陰惨な悶えのようなものには感染しないですみそうだった。

ところで、この富子の室の、もう一人の一年生が、出石芳江だった。隣県のある街の、物堅い商家の娘ということだったが、家が傾いたかして、高等学校を出て三年間も銀行に勤めていた。こんなことは、口数の少い芳江が、後になってぽつぽつと話したことだが、とにかく、一年生にしては、かなり女らしく成長しているという感じだった。すらりとして色も白く、富子などはそうも思わなかったが、きれいな人だ、というものもあった。年もかけはなれていたので、一年の若い子たちと仲良くなることもむつかしく、いつも一人ぼっちになって、みなに敬遠されているという形だった。もちろん富子も、はじめから虫が好かぬ人だと思った。そういえば、この全寮の女の子たちは、すべてが

たがいに何かの反感を持ち合っていたともいえるが、この出石芳江はその皆の中でわけても孤独だった。いつの間にか、——おそらくは同じ街からきたものの話が伝わったのだろうが、芳江には愛人があって、いま東京の大学に行っているということ、しかし彼女の両親が結婚を許さないので、苦しい立場にあるということ、それで彼女は、その愛人と共稼ぎをでもする力を得ようとここに入学したらしいということ、いや、彼女は愛人の精神の伴侶になるだけの知識を求めて入学したのであるらしい——などという噂が立った。何はあれ、出石芳江に愛人があるということは、現にそれらしい手紙のやり取があるようだということからも、また、どことなしに成熟した女らしさが彼女に匂っていることからも、本当のことと思われた。少くとも、甘い雑誌からの受売りなどで、嘘っぱちの空想のお惚けをいっているものなどとは、芳江はちがっていた。

目的は何であれ、出石芳江は、一人ぼっちになっていることも気にならないかのように、ただ勉強に打ちこんでいた。学問をすることによって恋愛の成功をはかるなどということは、富子などにひどく奇妙な考え方としか思えなかったが、とにかく芳江は熱心だった。——ところが、気の毒なことには、彼女はさっぱり出来なかった。それは頭が悪いからだといってしまうのは正しくはなかろう。三年間の間に、語学も数学も何もかも、ほとんど忘れてしまっていたのだから、今さら彼女は高校の一年くらいのところから積み直しをしてゆかなければならなかったわけだ。それには、人の何倍かの時間を持つ必要があった。しかし、この寮の生活は、それを許さない。十時に灯が消える時、夜ごとに芳江が見せる無念そうな顔つきは、不気味なほどで、無関心な富子ですら同情を感じることもあった。いつか、ちょっとした考査の前の夜には、廊下の片隅にあった差込み線を見つけて、そこに灯をつけて、這いつくばうようにして暁方までも勉強したらしかったが、その翌日には、もはやそれを探知していた五条寮長に、はげしく叱られた。五条は、きっと、芳江と東京の愛人との間に交換される手紙を、湯気か何かで開いて検査していたにちがいなかったから、それについても皮肉をいうか責めるかしたらしかった。五条が芳江を好んでいないことは、誰の眼にも見えることだった。芳江の心はそうしたことから鍊んでしまって、手紙のやり取も憚かるようになっていたが、それだけに彼女の寮長への反感もしだいに強いものになってきたようだった。そして、ある時彼女は、五条を通り抜けて、直接に補導監平戸に、下宿に出して下さいと嘆願した。しかし、それは許されることでなかった。たとえ自由主義者ぶりたがる平戸が何とか考えようとしたところで、五条が許すは

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook